様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：８４６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１１２１

研究課題名（和文）鎖国期日本のマジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロとカトリック修道院

研究課題名（英文）On the majolica albarello with the polychrome foglie motif in National Isolation in Japan and Catholic monastery

研究代表者
松本　啓子（MATSUMOTO, Keiko）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・客員研究員

研究者番号：２０３４４３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：茶道の水指で有名な17世紀中～後半のマジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロは、ヨーロッパ製品に照らすと17世紀前半のオランダ製の本体に16世紀後半の色絵フォグリー文を描いた壺となり、ヨーロッパでアルバレルロがカトリック修道院の内面無釉の薬壺で、同一型式がないことから、日本の壺はカトリック、茶道、貿易関連の人の関与でオランダへ注文した17世紀の品と考えた。
禁教令下にこの注文は不可能とみられたが、博多と長崎のマジョリカ出土地付近に茶人で貿易商の神屋宗湛、キリシタンで貿易商の末次興善と長崎代官も兼ねた子の平蔵、千々石ミゲルが居り、記録からも、彼らとオランダ商館の関与した注文の可能性が考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日・欧のマジョリカ陶器出土品の比較から日本の色絵フォグリー文アルバレルロは16世紀後半の意匠を描く17世紀前半のオランダ製の壺と判明し、マジョリカ分布の変遷から宗教改革期のカトリックと繋がる壺とわかった。この壺はキリシタン、茶人、貿易商の関与なしには生まれないので、禁教令・渡航禁止令下の日本の注文は不可能とみられたが、貿易商と元キリシタン大名の所領で出土し、17世紀前半の博多と長崎の出土地付近には貿易商茶人、キリシタン貿易商とその子孫の長崎代官、遣欧使節の千々石ミゲルが居たので、彼らが関与したオランダ商館への注文と考えられた。
出土品が鎖国前後と宗教改革期の日欧通商の一端を明らかにしたのである。

研究成果の概要（英文）：The polychrome foglie majolica albarello, known as a pitcher for Japanese Tea ceremony, was excavated in Osaka in Japan, dating to the middle-late 17th century. Comparing with the European majolica, there is nothing identified in Europe, because Osaka finds has a Northern Dutch body of the 1st half of the 17th century with the foglie motif of the late 16th century and with inner glaze. Therefore, it would be ordered for Japanese Tea Ceremony, I thought. But when the Catholicism and going abroad were prohibited in Japan, this order seems impossible. However, in the early-middle 17th century, there were likely persons in Hakata and Nagasaki, a Japanese tea master and foreign-trader Soutan Kamiya and a Catholic and foreign-trader Kozen Suetugu and his family, when a Japanese Jesuit Miguel Chijiwa, having been to Europe, was also in Nagasaki. By gathering their information, it is most likely to have made the secret order of this albarello through the Protestant Dutch East-India Company.

研究分野：日欧陶磁器考古学

キーワード：マジョリカ陶器　色絵フォグリー文アルバレルロ　宗教改革　天正遣欧少年使節　禁教令　末次興善　末次平蔵　神屋宗湛

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

マジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロ、この陶器壺が本研究のテーマである。

マジョリカはルネサンス期の高級陶器で、アルバレルロは口径と底径がほぼ等しく、高さが口径の約二倍、または等倍の、上下両端を絞る寸胴壺である。日本の色絵フォグリー文アルバレルロは、大坂城・城下町跡出土品（図１の 1）や伝世品（図１の 2）のように、線描きで輪郭を描いて中を青・黄二色に塗り分けた葉文（色絵フォグリー文）を胴部に描く。17 世紀半ば～後半に集中して出土する。色絵マジョリカの出土地は、将軍墓や城郭、武家屋敷、貿易を許された「五か所商人」の街の商家で、いわゆる上流層・富裕層の居所である。同様の壺の伝世品は茶道の水指として知られ、箱書きなどから鎖国期・17 世紀の、オランダからの輸入品と考えられてきた。

1：大坂城下町商家跡（大阪市教委蔵・大阪市文化財協会保管）、2：森忠彦氏蔵、3～7：フランス・トロワ修道院付属薬局博物館蔵、8・9：アムステルダム旧ヘーレン運河埋立土（アムステルダム国立博物館蔵）、10：北部オランダ語圏製品（アムステルダム国立博物館蔵）、11：興善町遺跡（長崎市教委蔵）、12：大村市玖島城跡（長崎県教委蔵）、14：宮津城跡（宮津市教委蔵）、13：博多遺跡群（上呉服町、福岡市埋蔵文化財センター蔵・写真提供）
（1 の復元図：大阪市文化財協会『大坂城跡』Ⅶ、2003 をもとに意匠部分を加筆、10：Dingeman Korf “Nederlandse Majolica” 1981 より転載）

図１　主な日・欧のマジョリカ陶器（1・2・11~14：日本、3～10：ヨーロッパ）

科学研究費補助金を受けたこれまでの研究（基盤研究 C、研究代表者：松本啓子、課題番号 15520488 および課題番号 20520673）で、ヨーロッパではマジョリカ陶器がヨーロッパの修道院の薬局に並ぶ薬壺で、カトリックとの繋がりの強い陶器であることや、色絵フォグリー文が 16 世紀後半の意匠であることがわかった。

しかし、アルバレルロ本体の形態はプロテスタント地域の北部オランダ語圏の製品（図１の 8）に酷似し、8 の出土位置や伴出の 1644 年銘の皿 9 から 1630・40 年代のものと判明した。即ち、日本の色絵フォグリー文アルバレルロはヨーロッパでは意匠と本体の時期が異なる奇妙な壺であるため、彼の地に同一型式がないのである。ゆえに、日本のものは 16 世紀後半の色絵フォグリー文を写した 1630・40 年代のオランダ製アルバレルロで、日本からの注文品と考えた。

しかし、その頃のヨーロッパは宗教改革期で、プロテスタントのオランダが、カトリックにしかない修道院の薬局に並ぶ壺の情報は手に入れにくかっただろうし、日本もカトリックを禁止し、海外渡航を禁止して鎖国に至る時期であったので、日本人がカトリックの陶器の情報を入手するのも難しいし、伴天連が茶道具の注文に関与したとも思えない。

では、このカトリック寄りの陶器の情報を、誰が日本に伝え、どのような経緯で注文するまでに至ったのか？ここから今回の研究は始まった。

２．研究の目的

日本のマジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロは、カトリック、茶道、貿易に携わる人が関与しないと生まれない。しかも、禁教令・渡航禁止令下なので、プロテスタントのオランダ東インド会社を介した 1630・40 年代の注文に限定される。つまり、これらの条件に該当する人の存在と彼らの接点が必要となる。しかし、禁教令・渡航禁止令下の日本に、カトリック修道院の色絵フォグリー文アルバレルロの情報を伝えることが出来た人物などいるはずがないと思っていた。ところが、唯一、16 世紀末に天正遣欧少年使節として渡欧し、帰国後、棄教して生き残った千々石ミゲルなら可能なのではないかと思い当たった。

そこで、本研究では、ミゲルの足取りを追跡し、この情報をどこで得ることができたのかを探るとともに、このカトリック寄りのマジョリカ壺の情報が、どのように茶道や海外貿易と繋がって茶道具として注文され、流通したのかを探ることを目的とした。

３．研究の方法

まず、これまでの研究を纏めた書籍『世界を旅したマジョリカ陶器』を刊行し、これを叩き台

にして国内外の研究者と意見交換を行い、情報を収集した。
　これらの意見・情報をもとに、改めて日本とヨーロッパのマジョリカ出土品それぞれの出土状況を分析し、考古学の手法で出土品の時期を確認するとともに、実際に国内外の出土地に赴いて地理的位置から得られる情報や、新たな出土品・伝世品の情報を収集した。
　あわせて、国内外の文献資料に記されたその時期、その地域の社会背景を探り、これらの情報を擦り合わせて、カトリック寄りの陶器の薬壷であった色絵フォグリー文アルバレルロが茶道具として注文・輸入された経緯を探った。
　これらの成果は、随時、日本考古学協会や The Society for East Asian Archaeology などの学会や講演会、研究紀要などで発表し、さらなる意見交換・情報収集を行った。また、今回の研究成果は、2023 年刊行予定の佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学』第 17 巻に収録されることになっている。

４．研究成果

・天正遣欧少年使節とマジョリカ（図２）

　ヨーロッパ・マジョリカは、カトリックとハプスブルク家の流通網を介して広がったが（図２左表）、その中で色絵フォグリー文（赤横線）は 16 世紀後半に盛んに採用された。この意匠のアルバレルロを見ることが出来た日本人は、イエズス会のつてで 1582～90 年に色絵フォグリー文が流行った地域を訪問した（右の地図と青点線矢印）天正遣欧少年使節の 4 人が考えられる。
　中でも色絵フォグリー文アルバレルロを 1930・40 年代に注文するまでの間に、この情報を伝えられたのは千々石ミゲル（図２の 60）の可能性が最も高いと考えられる。
　なぜなら、彼はキリシタン大名の大村純忠の甥、大村喜前のいとこで、他の 3 人が国外追放・獄死・病死して 1612 年までに亡くなっているのに対し、帰国後、彼は大村喜前に仕えて、17 世紀初頭に喜前とともに棄教することで 1633 年まで生き延びているからである。
　しかし、安穏と生き延びたわけではなく、禁教令の強化に伴い、1606 年に大村藩から追放されて有馬（雲仙）に移り住み、1612 年には有馬藩からも追放された。その後、ミゲルが 1622～23 年に長崎で住んでいたという記述がアルフォンソ・デ・ルセーナの回想録にある。
　そして、大村藩の玖島城跡からは 17 世紀第二四半期の色絵マジョリカ 29 が出土している。

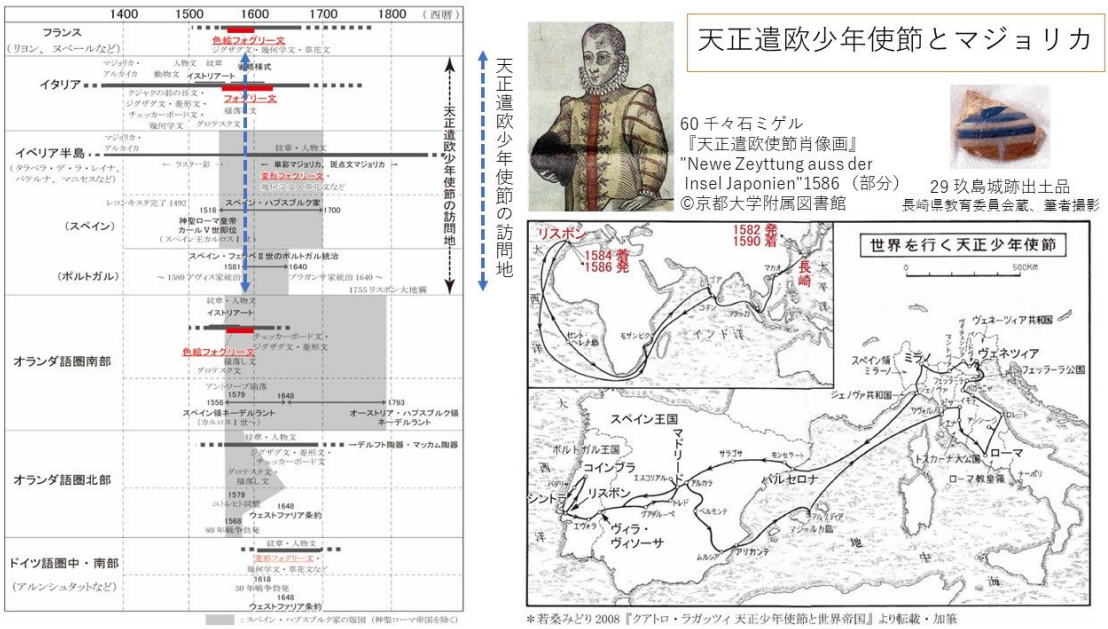

図２　天正遣欧少年使節とマジョリカ

・キリシタン大名とマジョリカ（図３）

　次に、マジョリカ出土した藩のキリシタンとの関連を探った。
　大村藩のようにかつてキリシタン大名が居た藩では、黒田藩の城下町である博多呉服町遺跡で色絵フォグリー文とみられるアルバレルロ 15 が出土し、京極氏宮津藩の宮津城跡でも色絵フォグリー文とみられるアルバレルロ 16、蜂須賀氏の徳島藩の城下町の武家屋敷から色絵フォグリー文アルバレルロ 10 が出土している。しかし、キリシタン大名が居た藩であっても、17 世紀初頭に、棄教後、転封された肥前有馬藩や、領地を没収されて本拠地を離れた豊後大友藩では、マジョリカは出土していない。

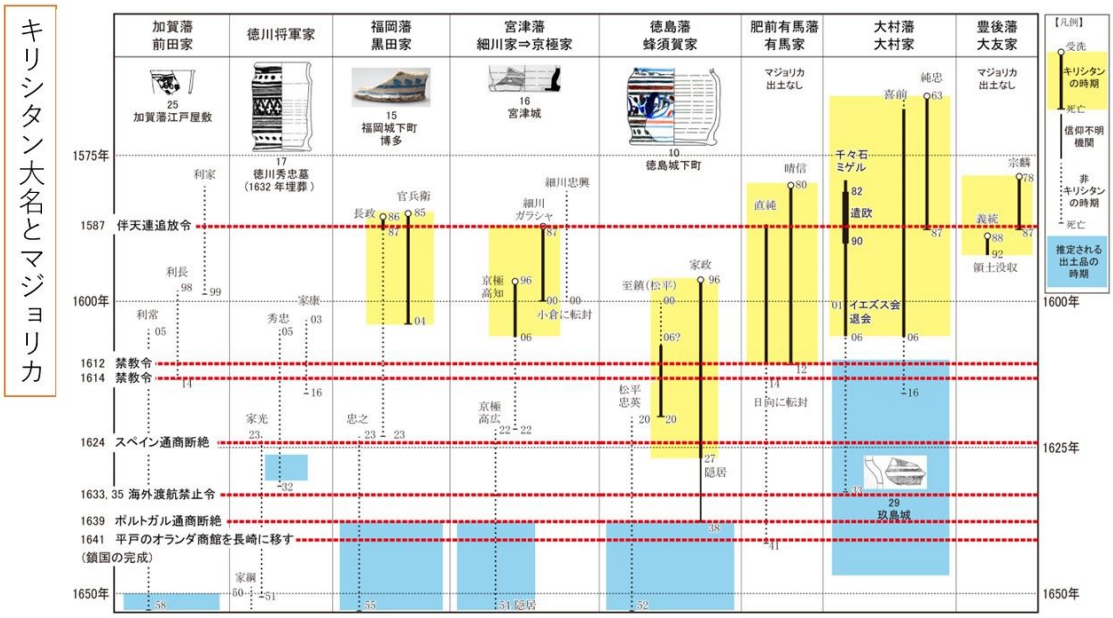

図３　キリシタン大名とマジョリカ

一方、キリシタンではない藩・将軍家では、徳川秀忠墓からプロテスタントのオランダ語圏で流通していた菱形文の小型アルバレルロ 17 が出土し、加賀藩前田氏の江戸屋敷ではフォグリー文だが、アルバレルロではない小杯 25 が出土している。これらはカトリック色の薄いマジョリカである。

キリシタン大名の時期(図３の黄色のトーン)と出土マジョリカの時期(青色のトーン) は連続しないが、この間に赤点線で示した禁教令や渡航禁止令が頻繁に発出されていることや、マジョリカ・色絵フォグリー文アルバレルロがヨーロッパではカトリック寄りの陶器であったことを考え合わせると、領主が棄教しても、領下にはまだカトリックの情報・流通網が秘密裏に残っていて、色絵フォグリー文アルバレルロはこれを通じて流通した可能性が考えられた。

・16 世紀末と 17 世紀中ごろの博多と二人の豪商（図４）

では、茶道とキリシタン、貿易商はどこで接点を持ったのか？

日本のマジョリカ出土地の周辺をみると、博多と長崎に興味深い人物が浮上した。神屋宗湛と末次興善である。図４は両者の関連地点を大庭康時 2009『中世日本最大の貿易都市・博多遺跡群』の図に示したものである。

図４　16 世紀末と 17 世紀中ごろの博多と二人の豪商

太閤町割で整備された博多・上呉服町のマジョリカ（図４の 15）出土地から西約 350m の奈良屋町で、16 世紀末のメダイと、メダイ・十字の鋳型（図４の 61）が出土した。ここは茶人で豪

商の神屋宗湛の屋敷と推定地である（桃色トーン）。神屋家は石見銀山開発で財を成し、代々博多に居を構えた。宗湛は豊臣秀吉の特権商人として貿易に携わり、博多の太閤町割の整備や文禄・慶長の役に資金提供し、茶人としても名を馳せた。豊臣秀吉の死後は黒田家に仕え、1635 年に死亡した。

そして、博多の豪商でキリシタンであった末次興善（洗礼名コスメ・コ―ゼン）の屋敷が神屋宗湛の屋敷のすぐそばの市小路中町にあったという（紫色トーン）。末次興善は 1570 年の長崎開港に合わせて長崎の街の建設に携わり、長崎には興善の名を冠した興善町が今でも残っている。そして、色絵フォグリー文アルバレルロが出土しているのが興善町遺跡なのである。末次家は長男が博多の商家を継ぎ、興善と共に長崎に移った次男の平蔵が長崎の商家を営み、1619 年から長崎代官も兼任した。

・末次興善・平蔵、オランダ商館とマジョリカ（図５）

『正保四(1647)年長崎警備図』（福岡市博物館蔵）には本興善町や後興善町が記され、本興善町の南隣に新町がある。これらの街を含む黒線の範囲が興善町遺跡で、17 世紀前半の色絵フォグリー文アルバレルロ 18～23 は☆印と○印の 2 地点で出土した。

平蔵の名と商家、長崎代官職は子・孫・曾孫が踏襲し、平蔵の名はオランダ商館の記録に記されていて、オランダ陶器の通商に携わったことがわかる。

オランダ商館の記録によると、平蔵の船と台湾オランダ商館の諍いにより、1628～32 年は日蘭通商が停止し、平戸商館も閉鎖されたとある。この間、長崎に抑留されていたオランダ船の船長が秘匿していたオランダ陶器を 1630 年に末次家の番頭が見つけ、これらを平蔵屋敷に強制移管させて半年後に売り捌いたとある。これがオランダ陶器の初出記事で、1632 年埋葬の秀忠墓の小型の菱形文アルバレルロ 17 はこの時のものの可能性がある。売却までに初代の平蔵は亡くなったが、2 代目平蔵は 1633 年に型・見本を添えてオランダ陶器を注文し、督促状や承諾状のやり取りもあった。興味深いのは、1637 年に「日本人は骨董品のような大理石のような模様の陶器を好む」と本国へ報告し、1640 年に「欧州貨物は殆ど売れないが、注文の陶器は売行き状況を見る必要がある(見込みがある)」と報告していることである。1630・40 年代製作の日本の色絵フォグリー文アルバレルロはこの注文陶器に含まれる可能性が高い。

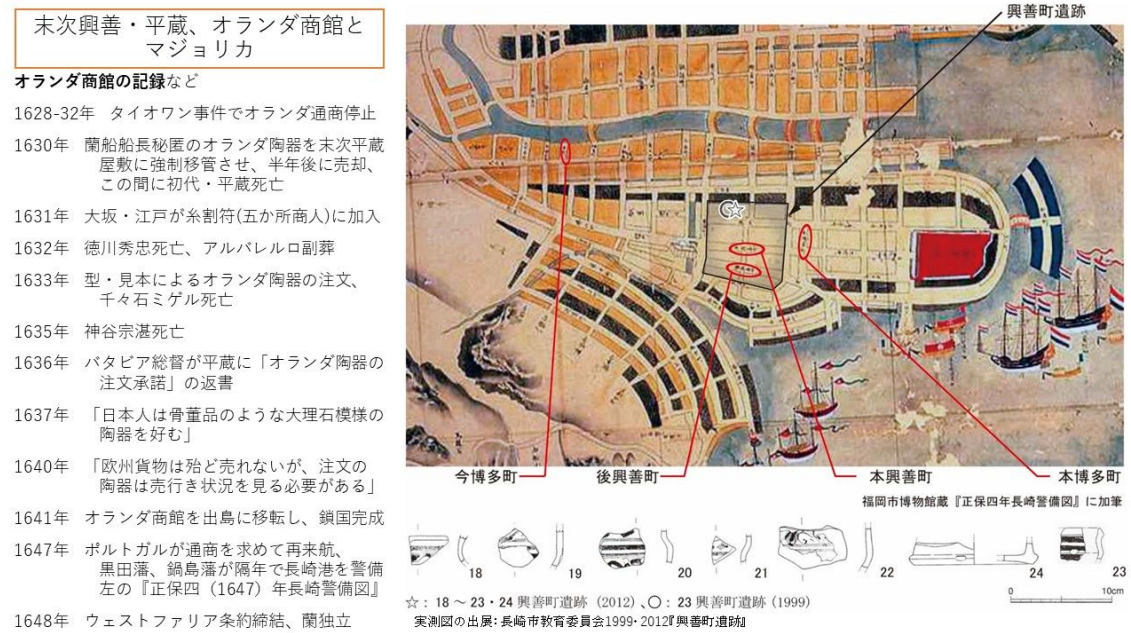

図５　末次興善・平蔵、オランダ商館とマジョリカ

・まとめにかえて

これらは状況証拠ではあるものの、博多・長崎ほどこういった様々な条件が揃う場所は他にないので、日本の色絵フォグリー文アルバレルロは、1630・40 年代に、茶人、キリシタン、貿易商と、晩年を長崎で過ごした千々石ミゲルが、長崎・博多で接点を持ち、平戸のオランダ商館を介して注文された可能性が高いと考えられ、将軍も持たないこの意匠の壺は、禁教令下に秘密裏にカトリック情報網を通じて流通したものと考えられた。

このように、本研究では今まで繋がりが不明だったこのカトリック寄りの陶器の情報を誰が禁教令下の日本に伝え、どんな経緯で注文するまでに至ったのかについて、可能な人物と道筋、及びその背景を示し、出土品から鎖国前後、宗教改革期の日欧通商の一端を示すことができたといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 松本啓子	４．巻 1
２．論文標題 鎖国とマジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 奈良文化財研究所紀要2022	６．最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本啓子	４．巻 17
２．論文標題 続・マジョリカ陶器の物語―日本の色絵フォグリー文アルバレルロはいかにして生まれたのか―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中近世陶磁器の考古学	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 松本啓子
２．発表標題 出土品が語る”世界の歴史”－鎖国期の輸入品取り扱い説明書－
３．学会等名 大阪市博物館協会学芸員TALK&THINK
４．発表年 2019年

１．発表者名 松本啓子
２．発表標題 天正少年遣欧使節Quattro Ragazziとマジョリカ・アルバレルロー日本にヨーロッパ情報を伝えたのは誰か？－
３．学会等名 第86回日本考古学協会総会研究発表
４．発表年 2020年

１．発表者名 松本啓子
２．発表標題 マジョリカ・アルバレルロと天正少年遣欧使節
３．学会等名 奈良文化財研究所2020年度第4回国際遺跡研究セミナー（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 松本啓子
２．発表標題 鎖国期の色絵フォグリー文アルバレルロと天正遣欧使節
３．学会等名 第87回日本考古学協会総会研究発表
４．発表年 2021年

１．発表者名 松本啓子
２．発表標題 鎖国期のマジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロの再検討―出土例の背景に垣間見るカトリックとの関係―
３．学会等名 第88回日本考古学協会総会研究発表
４．発表年 2022年

１．発表者名 Keiko MATSUMOTO
２．発表標題 On the excavated majolica albarello with the polychrome foglie motif
３．学会等名 Ninth Worldwide Conference of The Society for East Asian Archaeology（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松本啓子
２．発表標題 出土陶器片が語る朱印船時代の日本とヨーロッパ―マジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロと千々石ミゲル―
３．学会等名 第34回東アジア古代史・考古学研究会交流会
４．発表年 2023年

１．発表者名 松本啓子
２．発表標題 鎖国期のマジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロはいかにして生まれたのか？ー出土例の背景に垣間見る茶道と貿易、カトリックとの関係ー
３．学会等名 第89回日本考古学協会総会研究発表
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 松本　啓子	４．発行年 2021年
２．出版社 清文堂出版	５．総ページ数 255
３．書名 世界を旅したマジョリカ陶器	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関